
肌をなでる風

ミュキハルト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
肌をなでる風

【Nコード】
N8231Q

【作者名】
ミュキハルト

【あらすじ】
「俺」と「彼女」（千春さん）と「彼女の娘」（千尋）の話。

季節の移り変わりで、物語の時は進みます。

出会い、別れ、再会。

簡単なことではないけれど、想い1つで出来てしまうことってあると思うんです。

季節観（前書き）

愛するが故の喪失感。

痛みは消えず。

ただ、四季は巡るのみ――。

季節観

吐く息の白さに凍える冬。肌を刺す空気に氷を連想する。冷たさ。固い感触。あのキンとした、骨の芯がしみるような、震え上がるような感覚。外気につるんと濡れた透明感は、触れた指に融け出した氷の輝きであり、朝焼けに煌めく冴えた光だ。しかし冬の夜明けは遅い。しかも薄暗い。心のどこかで、俺は空が明らむのを待っている。冷たさをほぐす熱を無意識に探している。寝られない。そつと息を吐いて眠りたい。欲しい熱はどこにもない。

幾分柔らかくなった外気が、生き物に意識の覚醒を求める。窓の向こうに小さな蕾があった。桜だ。いずれ咲き誇り、散っていく運命の花。その一瞬の間に、人を惹きつけ見せつけ魅了して、突然終わりを告げる。綺麗な薄桃色の花卉は、無言で土へ還る。

夏の夜風は寂しい。ひんやりとした冷たさに木々が鳴く。真昼では青々と輝く葉は、夜闇に黒々と不気味に浮かび上がる。虫の音をつれて、風はカーテンを揺らして部屋に入り込む。長居はしない。すぐにどこかへと行ってしまふ。いっそさらってくれと思う、俺を残して行くのなら。俺は風が含んだ水の匂いに弱い。好きだったから。忘れられないひとの姿が、目裏に浮かぶ。夢の縁で、俺は未だ覚めない幻を追いかけている。

いつの間にか、秋は訪れている。

目の前を、風もないのに枯れ葉がパサリと落ちるのを、驚きもなく見ることはできない。刹那の恐怖。西の空が赤く染まった中で、長く伸びた自身の影と暗い木々の静けさに言い様のない寂しさを覚える。それは彼岸花の鮮烈な赤を見たときにも感じる。本当は目を奪うほど美しいのに、やけにひっそりと佇む姿に悲しみが沸き起こ

る。別れの色だ。

木枯らしが吹く。地を滑るように、空を翔るように。
とても寒い。

街中の喧騒のためか、木々が大きく震えているのにその音は聞こえない。

濃緑と黄と橙の葉が乱れ舞う。西日をキラキラと弾いて白く輝くさまは、まるで紙吹雪だ。角度によって色を変え、速度を増しながら俺を掠める。

風は吹き抜ける。また、冬が来る。

彼女の去った世界に、また何事もなく、四季は巡る。

季節観（後書き）

固くて暗くてごめんなさい（汗）

最初にベースにしたものより暗くなっしまいました（泣）

本当はこの『季節観』 Ⅱ 『肌をなでる風』で1つだけの短編だったのですが、

「どんな短編よ？」と自分で思ってしまい、改めて連載にすることに決めました。

一応ラストのイメージはあるのですが、今回は投稿が遅くなるかもしれない。

あ、長文にはなりません。苦手なので（笑）

気長に付き合っていただけだと嬉しいです。

春に咲く恋の花（前書き）

ひとひらはなびらを、じっと見守るいとまもない――。

春に咲く恋の花

「彼女、本当に歌が上手いんだ」

雪が降るように。

いくつもいくつも舞散る桜たち。

雨のようにサラサラと。

風に吹かれて散る様は、まるで紙吹雪。

一片の花弁を、じっと見守る暇もない。

その中で、彼女は歌を歌っていた。

その声に、

心臓が震えた。

生まれて初めての経験だった。

彼女から目が離せなかった。

頭の芯から爪の先まで、彼女に捕らわれていると思った。

一目惚れだった。

やわらかな黒髪が風にふわりと浮く。

歌声が風に乗る。

メロディーが自然と体を揺らす。

少し恥ずかしげに胸に手を当てて歌う姿が可愛かった。

俺よりも年上の女性なのに、こんなことを思うのは失礼だろうか。

花見も兼ねた、新人社員歓迎会。

その席で、俺は千春さんに恋をした。

春に咲く恋の花（後書き）

『肌をなでる風』は、ほとんど「俺」の独白（？）で進んでいきます。

（最初は詩の形式を取り入れるはずが、あえなく断念……）

温かく読んでくださると嬉しいです（泣）

新緑は青く（前書き）

彼女は風のようなひと——。

新緑は青く

「私、バツイチなの」

風だ。

草花の匂いが漂う、ふわりと肌を滑る風。
太陽の光に爽やかに、雨粒に湿っぽく。

彼女は風のようなひとだった。

彼女の手を俺は掴めない。

人混みの中で、気を抜けば彼女を見失ってしまう。

俺は幼子のように迷子になる。

どこまで見渡しても、彼女はいない。

やっとのことで見つけ出しても、彼女は背中を向けて振り向かない。
い。

彼女が見ているのは、俺じゃない。

彼女は一児の母だった。

無償の愛を娘に捧げている。

ほんの少し、俺は嫉妬した。

大人気ないと思う。

でも彼女の親バカぶりは呆れるほどで――

……俺はたぶん、あの子が羨ましいのだ。
そして、どこかで自分と重ねている。

あの子を、可愛いとも思う。
少し生意気だけど。

彼女は時々、俺にも愛をくれる。
ちよつとした些細なことだ。

俺の食事の栄養面を気にしたり、
お酒は体に悪いからと軽く制限したり。

まるで母親のよう……。

たぶん、愛だ。

一応、付き合うことはOKしてくれた。

先輩後輩ではないこの関係を、今はただ大事にしていこうと思う。

ゆっくり。

ゆっくりでいい。

彼女が必要なときに、俺がそばにいればいい。

新緑は青く（後書き）

『新緑は青く』のイメージは、やっと付き合い始めた初々しい（？）2人です。

若緑が徐々に色づくように、ゆっくりと……。

夏の終わりを告げる風（前書き）

いつか三人で暮らしたい――。

夏の終わりを告げる風

「俺は俺です。千春さんを置いていなくなったりなんてしない」

夜。

水の匂いを含んだ風が吹く。

透き通る虫の音を抱いて俺の肌をなでる。

レースのカーテンが揺れて翻る。

ぶわりと風が部屋へ入ってくる。

その勢いに、一瞬胸が騒ついた。

夏の夜風と違う。

しっとりというよりもどこか乾いた、殺伐とした風だった。

眠る彼女の髪にそっと指を通した。

その寝顔にほっとした。

彼女は、俺を受け入れてくれた。

そのやわらかな肌で、包み込んでくれた。

愛しさが込み上げる。

彼女の頬にそっとキスをする。

いつか、三人で暮らしたい。

そんな話を、いつか彼女にしてみたい。

もうすぐ、秋が来る。

もうすぐ、運動会の季節。

夏の終わりを告げる風（後書き）

『肌をなでる風』には裏話が存在します。

それをあとで載せようと思っているので、

「この文章、意味がわからん」ってところもそれで補足できる……
と思います。

自信ないですが（泣）

ちなみに、

「運動会の季節」と「俺」が言うのは、

彼の中で、千春の娘の存在が大きくなっていることを指しています。

突然の秋雨（前書き）

風が去る。もう、戻ってこない――。

突然の秋雨

「嘘だ……うそだ……」

風が去る。

木々が揺れる。

闇の中で葉が落ちる。

落ち続ける。

街灯のそばに植えられた赤い花。

地面に散った花卉が、まるで血痕のように見えた。

風が吹く。

俺を残して過ぎていく。

暗闇が体の内にしみて、穴をあけた。

限度なく広がっていく。

苦しい。

彼女が痛みを感じる時間はなかったと言うが、
本当にそうなのか？

本当に、苦しまなかったのか？

痛くはなかったのか？

彼女は本当に——……

ああ、

無意味だ。

何の意味もない。

俺が今、何を思ったって
何も戻らない。

もう、戻ってこない。

まるで示し合わせたかのように、雨が、降り始めた。

風が打つ。

激しく。

強く。

風がさらっていく。

葉が舞い上がる。

雨が何もかも落としていく。

穴底の暗闇だけがそこにある。

冷たい、夜が。

冷たかった。

彼女の頬が、冷たかった。

突然の秋雨（後書き）

『季節観』を書いたときにすでに決まっていた話だとはいえ……

誰かが死ぬのは、正直つらいです。

気分を害された方、すみません。

六花／それでも春はやってくる（前書き）

『季節観』の冬と春にリンクします。

六花 / それでも春はやってくる

【六花】

真っ白な空

ふわりふわりと落ちる黒

純白の結晶

静かに

とても静かに

雪の花、降り積もる

音をなくした世界

染まる

白く

なくしていく

覆われて

隠されて

消えていく

花に埋もれる俺のカラダ

いつまでも氷の匂いが鼻を突いた。

〵
〵
〵

【それでも春はやってくる】

桜の木を、部屋の窓辺に座って眺めていた。

散って、散って、散って。

花弁はただ散っていく。

風に吹かれて、

遠くへ、遠くへ、飛んでゆく。

行き着く先は、誰も知らない。

無意識に、歌を口ずさんでいた。

好きなところだけ。

彼女が好きだったところだけ。

空気を震わせてどこまでも響いてく、優しい歌。

彼女の声を思い出す。

その言葉を。

その詩^{うた}を。

その旋律を。

彼女が歌うことはもうない。

彼女の声は、もう聞こえない。

六花 / それでも春はやってくる（後書き）

文字数の関係で、2つ同時に投稿しました。

時系列は――

← 『春に咲く恋の花』

← 『新緑は青く』

← 『夏の終わりを告げる風』

← 『突然の秋雨』

『六花』 『それでも春はやってくる』 Ⅱ 『季節観』 の冬と春――で
す。

冬のぬくもり（前書き）

かけがえのない家族——。

冬のぬくもり

部屋を出たとき、昨日の寒波の影響で降り積もった雪が、日の光にミシミシと音を立てて徐々に溶け出していることに驚いた。あまり雪に慣れていないから、ちょっとした雨との違いに新鮮な気持ちを抱いて感動した。

明日もまた雪が降ると予報があった。最近はコロコロと天気が変わる。

実に不安定だ。

子供の頃、雪が降ると嬉しくてずっと空を眺めていたのを思い出す。はしゃぐ俺を、母がにこにこ見ていたような気がする。その頃は、母の仕事のために二人で過ごせる時間は限られていたから、その視線がとてもほっとした。ずっとこのまま時間が止まればいいのになんて思ってた。

富永の家に暮らすようになってからは、家の中で雪を見るときは一人か、正晴まさはるがそばにいた。

本当に、義兄はよく俺の面倒を見てくれた。

誰かがそばにすることで、俺は自分を保っていたような気がする。母がもういないことを、ゆっくりゆっくり受け入れていけたのは、ずっと見守ってくれる存在があったからだ。

血は繋がっていないなくとも、俺には確かに、かけがえのない家族がいた。

〃
〃
〃

千尋^{ちひろ}に会うきっかけは、突然の電話だった。
相手は彼女の母親の代理だ^{ちほろ}と名乗った。

「ちいちゃんを引き取ってあげてください。お願いします……」

初老の落ち着いた丁寧な声だった。

電話の主は、この一年に起きた事を語り始めた。

一年前、千尋を引き取った彼女の母親・春江^{はるえ}は、しばらくして認知症を発症した。彼女はそのまま孫と暮らすのが困難になるかもしれないと思い、千尋を数少ない親戚に預けようとした。しかしどれもうまくいかず、結局千尋は盥回^{たらい}しにされて、先日、また彼女の元へ戻ってきた。

春江は、今は介護施設に入居している。
代理と名乗る人物はその友人だと言った。

「春江さんは、ちいちゃんをとっても心配していました」

孫の存在を忘れかけている自分ではもう育てられないと、春江は彼に相談した。

そのとき、その声が聞こえていたのか、千尋が突然泣き出して言っただのだ。

『リョウちゃん！ リョウちゃんがむかえにきてくれるもん！』

彼は慌てて、俺を探した。

俺と千春さんの関係を、少なくとも彼は知らなかった。

「どうかお願いします。千春ちゃんのためにも、彼女を引き取って

あげてください」

俺は、電話口の前で呆れてため息が出そうになるのをどうにか堪えた。

正直、頭がおかしいんじゃないかと思った。千尋を施設送りにはしたくないのだろうが、俺は男だ。しかも戸籍上、俺は千尋と何の関係もない赤の他人だ。千尋のことを本当に思うなら、血の繋がった家族の間でどうにかしようとするのが普通だろう。俺の素性なんか全く知らないくせに、信用するなんて馬鹿げている。

——そうだ。

彼はどうして、千尋の言葉だけで俺に連絡を取ったのだろうか？

「——あの、もしかして私の身元を調べたんですか？」

一呼吸置いて、彼は申し訳なさそうに謝った。

「千尋ちゃんは春江……いえ、私たちの大切な孫ですから」

それは慈愛に満ちた声だった。

千春さんは、母親については何も語らなかった。

ただ、内縁の夫、つまり義理の父親がいたことだけは話してくれた。

『私とあの人とは、反りが合わなかった。』

あの人には自分より、義父が必要だった。

それだけはわかったから、私は家を出たの……』

彼女の義父は、俺より先に義兄・正晴に連絡を取ったらしい。

以前、千尋について彼が言おうとしていたのはたぶんこのことだったのだろう。

俺は千尋に会おうと思った。
会いたいと思った。

〃〃〃

去年の秋以来の再会。
さすがに緊張した。

彼女の忘れ形見。
まだあの小さな手は、俺の手を握り返してくれるだろうか。

三人で過ごした時間が頭の中によみがえる。

不安で、胸が押し潰されそうだった。

「リョウちゃん？」

第一声で名前を呼ばれて、俺はどうすればいいのかわからなかった。

戸惑った。

俺の空白の一年の中で、千尋は確実にその一年分の時間を身に刻んでいた。

特に変わったなと思ったのは、彼女の髪型だった。

千尋は自分の、母親と同じやわらかな髪質が気に入っていた。だからよく手入れをしていたし、俺が髪型を可愛いねと褒めると嬉しそうに微笑んだ。

母の手で、肩までかからない髪をサクランボの赤いゴムで二つに括るのも好きだった。

それなのに、今は背中まで伸びた髪をただヘアバンドで無造作に巻いただけだった。

俺はただ呆然と、

「ああ、もう一年が経ってしまったんだ」と思った。

千春という、恋人のいない一年。

千春という、母のいない一年。

誰よりもその存在を身に刻んだ少女は、きよとした瞳を大きく開いて、わっと泣き出した。

「ちい、あいたかった！ ママきてくれないから、ずっとリョウちゃんまっていた！」

ぽかぽかと膝を叩かれて、思わず俺は千尋を抱きしめた。

すっぽりと腕の中に入った温もり。

驚いた。

不意に目の奥からつんとした熱が込み上げてきた。

「リョウちゃん？ いたいのか？」

どこにそんな余裕があったのか、自分も泣いているのに、千尋は俺の異変に気が付いて頭を撫でてくれた。

「ごめんね。いたかった？　　いたい、いたい、とんでけー、してあげる！」

不意に、耳の奥で声が聞こえた。

『いたい、いたい、とんでけー。』

あ、おかしかった？

ごめんね。これ、いつも私がちに言ってるの。

私ね、思うのよ。これってホントに魔法だって。

だってちいがそれを唱えると、本当に痛くなるんだもの。

え、親バカだって？　　そんなことないわよ。

これは魔法なの。唱えられたら、きっと良介だってそう思うわ』

あの時、恥ずかしさのせいで俺は言えなかった。

体が疲れて弱っていた自分に、

千春さんの魔法は、本当に効いたのだ。

そして、今も。

俺は顔が歪むのを止められなかった。

「ううん、違うよ。……違うんだ。俺は、大丈夫だから」

噛み殺せなかった嗚咽が漏れたとき、千尋の小さな体が強張った。それでも頭を撫でてくれたやさしさが無性に愛しかった。

「ごめんな、会いに来てやれなくて。ごめんな、千尋……」

そのとき俺が言えたのは、たったそれだけだった。
千尋は小さく、ゆるしてあげる、と涙声で呟いた。

久しぶりに泣いた。

そういえば彼女がいなくなってから、俺は泣けていなかったんだ
と今頃になって気づく。

泣きたかったんだと気づく。

体が、千尋の熱でほんの少し温かくなっていた。

心が騒つかない。

とても安心している。

胸にしみた涙が、体の中にゆっくりと溶けていった。

その後、

俺は千尋の養父となった。

冬のぬくもり（後書き）

『肌をなでる風』の中で唯一小説らしい小説を、やっと投稿することができました。

『冬のぬくもり』は、

『季節観』の「風は吹き抜ける。また、冬が来る」の冬です。

なので、『季節観』の夏と秋にリンクする部分を飛ばしています。それはまた『裏話』として載せますので、よかったら読んでくださ
い！

そっちには「俺」の義兄である正晴も登場します。

四季／春が好きな桜（前書き）

季節は、いつまでもいつまでも廻っていく。

ふわりと、風が肌をなでる――。

四季／春が好きな桜

【四季】

しんしんと降る雪が、
風に舞って桜に変わる。

はらはらと落ちる花弁は、
土に触れた瞬間に緑の芽となり伸びていく。

ぐーんと、上へ上へ横へ横へ大きくなって、
深い青の葉をつける。

じりじりと陽に焼けて葉は色づき、
色とりどりに輝く。

ころん、と雨の雫はその上を転がり落ちて、
白い結晶となる。

そうして四季は廻っていく。

いつまでも。

いつまでも。

愛する人のそばで、廻っていく。

〳〵〵

【春の好きな桜】

この子のために。彼女のために。

俺は、何ができるだろう……？

試行錯誤の毎日だ。

気分転換。

窓を開けて、外に出る。

澄んだ空気。ふわりと風が肌をなでる。

近くの枝に、ほんの小さく芽吹いた新しい生命。

若緑の向こうには、もう桜が咲いている。

「千尋、花見は好きか？」

「はなみ？」

「桜の下でお弁当を食べるんだ」

「さくら！ おべんとう、リョウちゃんと食べる！ ちい、食べた
い！」

「よし。じゃあ、早速出かける準備をするぞ」

「うん。……どこいくの？」

上目遣いで見上げてくる千尋に、俺は目を細めて膝を折った。
目線の高さを同じにする。

「――俺が、ママを好きになった場所。とっても大切な場所だ」

そっとその髪に指をさした。

彼女のお気に入りのおサクラランボで、可愛く結ってあげようと思った。

「ママが大好きだった桜を見に行こう、千尋」

四季／春が好きな桜（後書き）

文字数の関係で、また2つ同時に投稿しました。

『肌をなでる風』、完結です。（表向きですが）

『四季』は、彼女（千春）視点の『季節観』です。

『春の好きな桜』は、哀しみはあるけれど、それでもやさしい気持ちで春を迎えてほしくて書きました。

……私、本当に作中で誰かが死ぬのは嫌いなんですよ。（現実もそうですが）

だから『季節観』を語る「俺」が頭の中に出てきた時に、「絶対にどうかして救わないと!」と思ったんですね。

死は、予期せず突然にあるもので。

どうにか、それを乗り越えてほしかったんです。笑顔になってほしかった。

でも、やはり「俺」1人では難しくて……。

『裏話』はある意味、単独でも成立するお話です。（今度はちゃんと小説です 笑）

『肌をなでる風』のおまけ、という感じで書きましたが、どうだろう……（汗）

「俺」に対する解釈が変わってしまうんじゃないかしら……。

まあ、どんな形でも「やさしく書こう」という思いは変わってないので、

興味のある方はぜひ読んでください。

最後になりましたが、

読んでくださった方、本当にありがとうございます！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8231q/>

肌をなでる風

2011年10月8日17時53分発行